

第2回 生駒市景観形成基本計画策定委員会 会議録

1. 日時 平成23年8月19日(金)9時30分～
2. 場所 生駒市コミュニティセンター4階401会議室
3. 出席者
(委員) 久会長、下村副会長、大原委員、樽井委員、福本委員、
植田委員、大西委員
(事務局) 吉岡部長、森本次長、前川課長、西本課長補佐、高谷係長、巽係長、
塩崎主任、浅井(以上、みどり景観課)
坂井、絹原(株式会社地域計画建築研究所)
4. 欠席者 嘉名委員
5. 会議公開 公開
6. 傍聴者数 3名
7. 議事内容

会長：おはようございます。それでは今日もいろいろと御意見をお伺いしたいと思う。

今日は、生駒民俗会の会長である今木義法先生の方からお話を伺いたいということでお越しいただいている。

私と先生とは緑の基本計画をずっとお手伝いさせていただいており、生駒のモリさんの存在が生駒の景観においても大切ではないかとかねがね思っていた。前からお話させていただいているように、景観は目に見える姿だが、その目に見えた姿を形づくる目に見えないものもあるので、そういうのも勉強させていただいて、今後の景観形成基本計画策定に役立てていきたいと考えている。

今日は民俗的、あるいは宗教的な意味合い等々、歴史の側面から今木先生にいろいろ教えていただいて、また意見交換をさせていただきながら、今後の景観づくりの貴重な情報にしたい。

(1) 講演会「村の聖地ーモリに宿るカミ」 生駒民俗会会長 今木 義法 氏 (概要)

<はじめに>

- ・生駒市は「関西一魅力的な住宅都市に」というキャッチフレーズでまちづくりを進めようとしている。魅力的な住宅都市に不可欠な要件は、インフラの整備、あるいは緑

豊かな環境の保全もあるが、地域の歴史と文化を大切に作る心も大変重要であり、今日はそういった観点からお話したい。

<生駒谷十七郷の原風景>

- ・「生駒」という地名は古くは『日本書紀』に記載がある。『万葉集』では「伊古麻」と表記されており、「射駒山」「伊駒山」「伊古麻山」「伊古麻乃山」「伊古麻多可祢」など全て「山」あるいは「高峯」とセットで書かれていた。
- ・古代では、都である飛鳥・藤原京・平城京から遠く離れた僻地、大和の西北隅の辺境の地として「神さぶる」霊地として捉えられていたと考えられる。
- ・中世に入ると、『竹林寺略録』において「地形は勝妙にして医王生身の庭なり。唐の五台山と異ならず」と、唐の五台山と遜色ないと評された。信貴山・往生院・髪切・鬼取・田原・石船と並んで生馬は修験道の聖地とされていた。
- ・近世では、湛海律師が著した『生駒山寶山寺縁起』に「其の山は先年麓を歩き過ぎしとき遙かに見る、そのゆへ知らずといへども、神仏霊応の勝地たるべきとおもひ」と述べられており、霊験あらたかな山として捉えられていた様子が伺える。
- ・現代では、大阪大学宗教社会学の会が『生駒の神々』という本を出版された。この本を出す前に先生方が市内を調査されたのだが、「四六時中、不思議な靈気を醸し出す」「生駒に入った途端、強い衝撃を受けた。異文化に接したときのカルチャーショックに似ていた」「生駒は民間信仰の宝庫」といった感想を述べられている。山中に無数の行場・宗教施設があることもまた生駒山の大きな特徴である。

<わが国古来のカミ>

- ・わが国古来のカミというのは、自然の中にあまねく遍在する存在であり、山・海・川・磐・樹木に宿るカミであった。自然の営みの中にカミの恩恵と怒りを感じ、それが大地・太陽・雨・暴風雨・雷・火山になって表れていると信じられていた。
- ・キリスト教のような絶対的な神を讃える一神教は高度な宗教であり、いろんなところに神を見出す多神教は低級な宗教であるという話があったが、これは迷信ではないかと思う。
- ・わが国の基幹産業である稲作農耕は、カミと共に働く生活であり、今も日本人の基層心理の中に脈々と継承されている。海開き・山開き・地鎮祭などでは、各所に遍在するカミに安全を祈願する。

<村の聖地—モリに宿るカミ>

- ・そうした自然にカミを見い出してきた我々は、樹木の繁茂するモリにもカミが宿ると考えてきた。そこにはヤカタも石造物もない、単なるモリの空間であった。なお、小祠などを祀るようになったのは後世である。
- ・宮脇昭氏も「森には神様がいる。鎮守の森は日本文化の原点です」と述べている。梅原猛氏は「森には神様がいる。神社には必ず森を残した」と述べているが、これは順序が逆で神社に森を残したのではなく、もともとモリにはカミが宿っており、後世に

神社（社殿）が建てられたと解釈すべきで、モリ自体が畏敬の対象であった。

- ・日本最古の神社である大神神社（三輪明神）には本殿はなく拝殿のみであり、三輪山が御神体である。また、春日大社の故花山院親忠宮司にお話を聞いたのだが、「遣唐使は東に向かって航路の安全を祈願した」というのである。社殿は南面しており北に向かって拝礼するのであるが、このエピソードは古くは東の御蓋山が御神体であったということを示している。

<モリのカミさん>

- ・「モリのカミさんはどんな神？」と村の古老に聞いても「モリのカミさんや」としか答えが返ってこない。要は、名もない、得体の知れない、言葉で説明しきれないカミである。
- ・「天之御中主神」「天照大神」など『記紀』に登場する神々は、人間の観念から生まれた新しい神である。

<各地に伝承されているモリ信仰>

- ・こうしたモリの信仰は場所によって呼称などは違うが、全国各地にある。一例を挙げれば若狭大島の「ニソの杜」、西石見の「荒神森」、薩摩の「モイドン」、美作の「荒神プロ」、西伯耆の「荒神」、沖縄の「御嶽(ウタキ)」など。
- ・こうしたモリの信仰には、厳しい禁忌が決められており、脈々と守られてきた。モリへの立ち入りを禁止したり、樹木や枝の伐採を禁止したり、中には枯葉一枚を持ち帰ることも禁止しているようなところも。
- ・また、禁忌を犯すと激しい祟りを受けるという話も多く、無数の体験談が残っている。湛海律師も「林木伐採するものあれハ或ハ火難を得又ハ悪病を受く」と書いている。私の身近なところでも祟りの話を幾つも聞いてきた。
- ・しかし、一方で村を保護してきた存在でもあり、モリがあることで雷が落ちない、流行病にかからない、という言い伝えもある。

<生駒谷の七森信仰>

- ・「七」という数字は、古来特別な思いが込められてきた数字である。人生の節目でのお七夜・七五三・古希（七十歳）・喜寿（七十七歳）や、象徴的数字としての七不思議・七賢人・七福神・七堂伽藍・七草粥など。あるいは多数を表す七曲がり・七つ森（『屈折率』宮沢賢治）や、故人の法要としての初七日～四十九日（七日ごとの法事）・七回忌など。
- ・生駒谷ではそれぞれの村に七つのモリを祀っていた（一部小村を除く）。これは他に類例を見ない特異な信仰である。
- ・以前、市内全域の聞き取り調査を行い、古老たちの語るモリをすべて数えていくと八森・九森・十森にもなるのである。本来モリは「七」と限らず多数存在していたのではないだろうか。

<なぜ七森なのか―七森信仰成立の契機>

- ・中世に生駒神社が八幡信仰を受け入れた。神社古来の祭神は「往馬坐伊古麻都比古神社二座」であるのだが、鎌倉期には八幡神（神功皇后・仲哀天皇・応神天皇・気長宿禰王・葛城高額姫）の五座を奉祀し、祭神が七座になったという。
- ・生駒神社は生駒谷十七郷の惣鎮守社であり、郷民の精神的支柱、村落共同体結束の絆であった。郷民の暮らしに絶大な影響力をもっていた。これは私の仮説だが、祭神が七柱になったのを契機に多数のモリを七森に集約したのではないかと思う。

<モリ信仰とみどりの景観保全>

- ・先人たちがモリのカミを畏敬し、厳しい禁忌を守ってきた信仰があって、その結果みどり豊かな景観を保全してきたのである。こうしたモリ（自然）への畏敬の念を忘れてはならない。
- ・「木を植えるのは心の問題。単に防災や環境保全、水質管理のためだけではない」と宮脇昭氏が述べている。
- ・往馬大社の社そうは平成 10 年に県指定天然記念物になった見事な原生林であるが、これは人間が手を加えて守ってきたのではなく、「手を加えなかったから保全されてきた」のである。
- ・急激な都市化の流れの中で、開発によりモリのいくつかが消滅してしまった。「モリを失ったことにより、自然を大切に守る豊かな心をも失ってしまった」のではないかと危惧する。
- ・地域の歴史と文化を大切にすることを養い、自然への畏敬の念を根底に据えた景観形成基本計画の策定を期待したいと思う。

会長：どうもありがとうございました。

「身近な森の歩き方」という本を共著で書かせていただいたことがある。私の担当は「水と神社の関係を調べる」というもの。水が沸いているところなどを大切にする、神社がたくさんあるところを大切にする、ということだ。この辺りでは、宇太水分神社（うだのみくまりじんじゃ）が名前のおり水と深い関係にある神社である。私も民俗に関心があり、今日の御講演を楽しみにさせてもらっていた。

昔の方々は環境に対する恐れや敬いを抱いていたからこそ、環境を守って来られた。景観の計画を策定するようなときにも、サイエンス、科学的なことだけではなく、このような心のことも入れ込んでおかないと、大切なものを守っていけないなと感じた。本計画において、心の問題を何らかの形で取り込んでいきたいなと思っている。

ひとつ、残念なお話がある。茨木市で新名神の工事をしているが、その茨木インターチェンジができるところに、千提寺という村がある。隠れキリシタンがいたという村で、半年前から村おこしをお手伝いしている。しまったなと思うのが、もうちょっと前からお付き合いしておけばよかったなということ。村には栗栖山という山がある。「くるす」というのは、キリスト教と関係がある言葉なので、そこがキリスト教徒の墓ではないか

ということになって、隠れキリシタンの村だということが分かった。その栗栖山を新名神の工事につぶしてしまうという話が持ち上がって、村の方々はお怒りになっている。NEXCO 西日本の担当者は、そういう民俗学的なことを調べずに道路の線を引いてしまったのだろう。それが村の人たちが一番大切にしていた山を飛ばすことになってしまった。工事の計画を立てる前に、地元の方々とお話をすれば分かることなのに、と思った。先生のお話を参考にしながら、計画の中にも民俗的なことをしっかりと書き記しておきたいと改めて思い至った。

こういうことも含めて、意見交換や御質問をさせていただきたい。

委員：もともと、モリは連続していただろう。「モリさん」という特定の範囲を選ぶ根拠や境界はあるのか。それとも、開発が進む中で残っているものが、モリさんになったのだろうか。

今木氏：残ってしまったものということはないと思う。残る前からモリさんは大切にされていたので。お話を聞いていても、どこからどこまでがモリさん、ということにははっきりしない。市内の萩原という村は、自分たちの伝統を守ろうという意識の強いところ。生駒神社の祭りは、「座」が中心となって準備をするのが習わしだった。市内の座はすべて昭和 38 年に解散してしまっただが、萩原だけは今も残っている。そんな萩原のモリさんだけを、生駒市が保護樹林に設定した。行政の方に動いていただくためには、地元の熱意が大事だと感じた。他の地域でも「モリさんを大事にせねば」という気持ちはあったのだろうが、もっと燃えるようなものがなければ状況は動かせないのだろう。今ではここがモリさんだということが分かるが、信仰が発祥したころは、なんとなくここに神さんがいらっしゃるという曖昧なものだったようだ。

委員：地形的な要因との関係はどうだろうか。生駒谷という地形は、奥山ではないけれど、水分条件がよくないから大きな木が生えにくくなっている。もともとの潜在植生があって、平群郡の方には信仰が成り立っただけでも、北の方には成り立たなかったと考えることはできるだろうか。

今木氏：高山の方に、杜山神社という神社がある。森という名を冠しているので、素朴な信仰の象徴だと思うが、大きな信仰には育たなかったようだ。一方で添下郡の南側の南田原村には、七森さんの信仰がある。北田原とか上の方にも、モリさんはある。でも七森の信仰という形にはなっていない。

副会長：非常に興味深く聴かせていただいた。自然は畏敬の念を抱かせる存在だ。自然を愛すべき、守るべきと改めて感じた。

生駒の北部が観音信仰で中部が奈良文化と平安中期ぐらいからの阿弥陀信仰というお話だった。ということは、村の成り立ちも違ってきているのだろうなという印象を受けた。それによって七つというところも関係してくるのかなと思いつつ拝聴していた。

水の出るところとの関係や地形的なこと、残っているところは入会権を持った共有地であったということがポイントだろう。モリさんには触ってはだめ、ということが共

有され、また木を切ると実際に災害が発生したりする。里山の中でも触ってはいけないところとして指定されてきたのだと思った。

オトダの森として萩の台を挙げておられたが、クヌギの木の写真は、あれは一度切られているように見受けられた。つまり、一旦は手を付けられたモリさんもあるのだろう。でもそのあと森は守られ、切り株から新しい芽が出たのだろう。

今木氏：崇りがあるというのは、切ったときに恐ろしい目に遭ったという経験があったのであって、それによって信仰が強固になっていったと考えられる。それがまた村落の中の共通認識となり、絆の意味も持っているのだと思う。信仰は多様さを持っている。

委員：先生がおっしゃったように、村の絆、精神的な支柱ということで考えてみると、現在では精神的支柱になり得るのか、という疑問がある。今であれば自治会という支柱というものもあり、いろいろな支柱が多様化している。昔ならば近所で農作業をするときに助け合うなど、そのときの精神的支柱としてモリがあったのではないか。我々の文化が進むにつれて、精神的支柱が多様化しているのではないか、という感じがしている。この辺りはどのようにお考えだろうか。

今木氏：萩原の南中学の南側に、九万八千の森という森がある。もっと大きな森だったが、住宅開発で小さくなってしまった。開発した業者さんが、交通事故にあったと村の人が伝えている。モリさんに接する敷地の家の方が、落ち葉が落ちて大変だということで村の人に木を切るようお願いしたが、村の人は自分たちでは崇りが怖くて切ることができないのでお金は村で出すから伐ってもらってくれ、と言ったら恐れて誰も伐らなかったという。確かに精神的支柱は多様化しているけれども、モリさんは信仰がなかった人にも恐れを抱かしてしまうという、まだまだすごい力を持っていると思う。

会長：『モリの神さんはどんな神さんや』と聞かれれば『モリの神さんや』と答える」という話があったが、理系の人は説明を求めたがる。説明できないことがあってもいいのではないかと思うが。

今木氏：ゲゲゲの鬼太郎の作者も、人間の住むところから闇がなくなった、妖怪が住めなくなった、と言っていた。分かる気がする。

委員：私は昭和 40 年生まれなので、自然の大切さを実感しながら育った世代である。気になるのは、生駒市民は大阪市へ勤める方が多いし、外から移ってこられる方が多いので、今お話いただいたようなモリさんということ、どのように意識付けできるのか、モリさんは支柱になるのか、というところが気になる。

平城京のところをバイパス 24 号線が迂回したのを事例にして、生駒市でも同様に景観を大切にしていってほしい。

副会長：人から聞いた話だが、天武天皇が食肉を禁じた令を出したので、日本には家畜を飼う文化が広まらなかった。牧草地を確保する必要がないことから、木を切る文化が広まらず、それが現在の木が残ってきた要因の一つではないかという考えがある。上から決めたような文化と、信仰としてのモリの考え方と、重ね合わせるべきなのか、なかなか

難しいと思っている。

今木氏：直接関係のある話ではないが、神功皇后が往馬大社に泊まった言い伝えがある。明るく朝早く出立するために、ニワトリにちゃんと刻を正しく告げるように命令した。すると、ニワトリは早く鳴きすぎて、神功皇后が歩いても歩いても夜は明けない。峠に着いても夜が明けなかったので、峠の名前が「暗峠」になってしまった。

その後神功皇后は、ニワトリを蹴飛ばして生駒川に落としてしまった。それが流れ着いて斑鳩の龍田神社の神様が拾い上げた。生駒では、ニワトリは食べてもいいけれど飼わない。逆に斑鳩では飼ってもいいけど食べない、と伝えられている。それと関係して、往馬大社では元日の深夜に鳥追いの神事というのをやっている。時間が時間なので見物客はあまりいませんが。

委員：最初に往馬神社にお祀りになったのは、伊古麻都比古二座（いこまつひこにぎ）か。あとで八幡に受け入れられたという話だった。五神が中央に入っているというのは？

今木氏：庇を貸して母屋を取られた、ということか。どういう経緯で八幡信仰が興ったのかは、学問的には確定的な説はない。鎌倉時代に竹林寺の行基墓を発掘したとき、東大寺から高僧がたくさん来ている。竹林寺と生駒神社は近接しているので、そういう関係で信仰が始まったのではないかという説もある。一方で、モンゴルが攻めてきたときに、鎌倉幕府がモンゴル軍を追い返すよう、全国に戦の神である八幡神の配置に力を入れたという説もある。そのような時代背景があって、往馬大社も八幡信仰を受け入れたのではないかと。

会長：八幡神は源氏の守り神。鎌倉時代に羽曳野から出立した。そういう関係もあるのではないか。

（２） 生駒市の景観の現状について

会長：今までいろいろな計画を策定させていただいたが、「生駒の歴史」と最初に書くものの、後ろの計画とのつながりが分からないまま終わることが多い。歴史があって現在の計画があり、将来があるので、歴史の部分を生かしていきたい。おもしろい計画が作れたらと思う。

今回は資料の説明だけにして、次回以降話し合っていきたい。

事務局説明（資料２）

会長：整理の仕方自体も次回、御意見いただければと思う。１ページ目は、私たちが手を加えられない自然の景観。２～３ページ目は、私たちの作用も入りながら形成される景観、という形で整理している。

(3) その他

①ワークショップ開催状況

事務局説明（参考資料）

会長：ストレートに「景観」の話は出ないかも知れないが、景観に関連する事柄は出てきているので、計画の中でも使わせてもらいたい。

②その他

会長：今日は今木氏にお話を伺った。今後この人の話を聞きたい、という人がいらっしやったら、リクエストをしていただきたいと思っている。景観というのは表面上目に見えるが、それを支えているものも非常に重要だと考えている。例えば、事業者の生業が形づくる景観など。ワークショップでは、生駒商店街の取組をお聞かせいただいた。またこのような機会を持ちたいと思っている。

委員：今木先生のお話はこれまでも何度もお聞かせいただいていたいて、行政の方も分かっておられると思うし、その度に学ぶところがあるのだが、例えば往馬大社にしてもお金が必要で、それをどうやって運営しているかというのが重要なのだろうと思う。茨木の話も、理想はあるが、何事もお金がかかる。あまり往馬大社のことは知らないが、例えば「上座」「下座」という言葉は差別的なのか、人権的にどうなのか、というようなこととか、光明中学校は小さいという字はいけないから明るいという字に変えるとか、でも景観というか、すべて歴史に関係することで。関西文化学術研究都市の、文化というのはどういう意味なのか、とか、そのあたりも今後議論するのか。これまでの規制の話に対して今後は理想を目指すのか。ある程度はまちづくりのためにはやむを得ない、潰していかなければならない、という部分も出てくるのだろう。

会長：そもそも、今作ろうとしている計画では、さまざまな意味を多面的に判断する。だから、ベストな解はなく、ベターを探す作業。そのために、たくさんの情報を集めて考える。ある一つの側面から見れば答えを出すのは簡単なのだが、さまざまな問題を絡めながら悩むというのが策定のプロセスだろう。今まで、民俗的な事柄や、金にならない事をあまりにも軽視した時代があったのではないかと、というのが問題意識にある。難しい問題だが、何を残して何を我慢するか、というのが核心だろう。それぞれの側面で理想はあるが、それがぶつかったときにはすべてが理想どおりにはいかないもので、ではどこでバランスを取るか、という話を2年かけて話していくのがこの委員会。事業者にも、民俗学的な話が絡まったときに、どうしていきますか、ということの参考にしてもらうために、今日のお話を計画に入れておくのが重要ではないか。ここで答えを出すのが目的ではなく、悩んでください、という情報を差し上げるのがこの計画の意味ではないかと考えている。

委員：今日の今木氏の話聞いて、変化球だと感じた。そんなことがあったのかと。子育ての考え方からしても、こういう文化を子どもたちに伝えることによって、継承していけ

る心が育つのではないかと思った。もう一つ、近頃パワースポットという言葉がはやっていて、若者が寄ってくる。今日聞いた話に出てきたことは、生駒の財産だと思った。うまくすれば、お金も生み出すかもしれないし、子どもの心を育てたり、緑を増やすことも可能かもしれない。

会長：そのとおりだと思う。宮崎駿氏のアニメは、分かりやすく自然の大切さを訴えている。理系的なものの発想の中で見落としがちなものがあると感じている。パワースポットのような話と、理系的なものの見方のバランスをとるために、悩んでいくプロセスが大切だと思う。今までの計画は、「こうします、ああします」と書ききるものが多かった。今思うのは、書ききらない計画があってもいいのではないかと思う。いろいろな側面があるのを描いて、答えを出すのはあなたです、というような。これは私の考えなので、これからみなさんと考えて行きたい。

委員：今思い返すと、宝山寺の鳥居は都市計画によって動かした経緯がある。もともと駅前にあるべきものだったのだが。

事務局：再開発などで、大きくものを動かすこともあるのだが、歴史文化の大切さを改めて感じた。

委員：長い間守られてきたものをしっかりと保護するため、制度が必要になってきたのだろう。でも、一人ひとりが少しずつ我慢する中で折り合いをつけることが大切だと感じた。今日聞かせていただいた「崇り」も、規制のように抑止力になるのではないかと思った。

会長：先程の新名神の話にしても、山はすべて山なのだが、実はそれぞれに意味があって、そこが分かっていたら道路の引き方も違ったのだろうと思う。奈良の今井町でもかつて道路問題があった。このときは文化庁が都市計画に対抗した経緯がある。昔からそれぞれの想いを込めてやってきたのだから、そのところを考慮したら開発にしても少し違うものができるのではないかと思う。開発をするなら、そこを読み取りながら欲しい。

景観計画と本計画を分けさせてもらったのは、国の法による束縛から解放されるため。ユニークな計画を作っていきたい。

事務局から、次回の策定委員会は10月ごろに開催を予定しており、日程が決まり次第連絡するとした。

以上